

【 添付 まとめ 1 】

弥生時代 西日本 特に日本海沿岸地域を中心とする鉄器の普及

野島永氏「弥生・古墳時代における鉄器文化」より

弥生時代中期の丹後地域では、水晶や碧玉、緑色凝灰岩を素材とした勾玉や管玉、小玉などの製作を開始。京都府京丹後市奈具岡遺跡（河野・野島 1997）で作られた玉製品は丹後の地域社会のなかで消費されたわけではなく、その大部分が贈答用の装身具として特別に生産されたものであったと想定できる。前漢で生産された鉄素材（鑄鉄脱炭鋼）の存在（大澤 1997）からは、海上交易によって日本列島では得られない鉄資源を入手していたことがわかる。

この鉄素材をうまく加工して玉生産や木器生産に利用し始めた（野島・河野 2001、村上 2005）。

後期になると、日本海沿岸各地域の首長達は貴重財を原料とした手工業生産の管理を行うことによって経済的な特権を獲得し、潟湖を拠点とした海上交流を通して中国大陸や北部九州をはじめとした日本海沿岸諸地域との交易に成功した。（たとえば妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡）

その結果、瀬戸内海や近畿地方よりも鉄製武器や工具の出土数が上回ることとなる（図 5.5、図 5.7）。

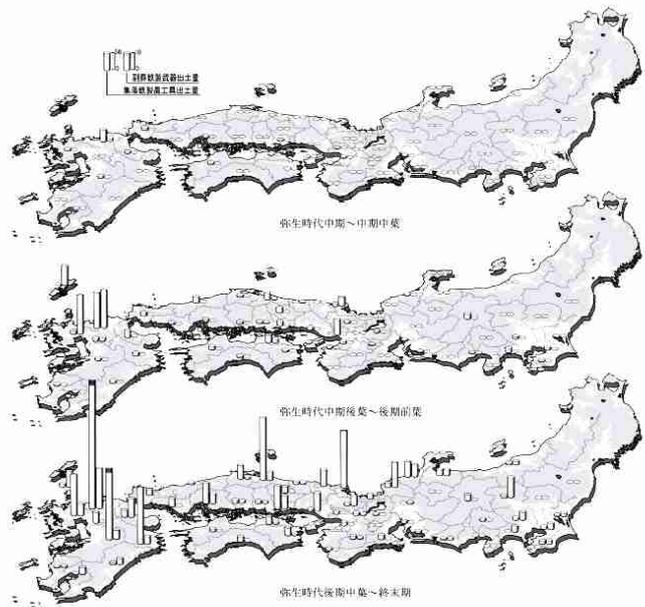
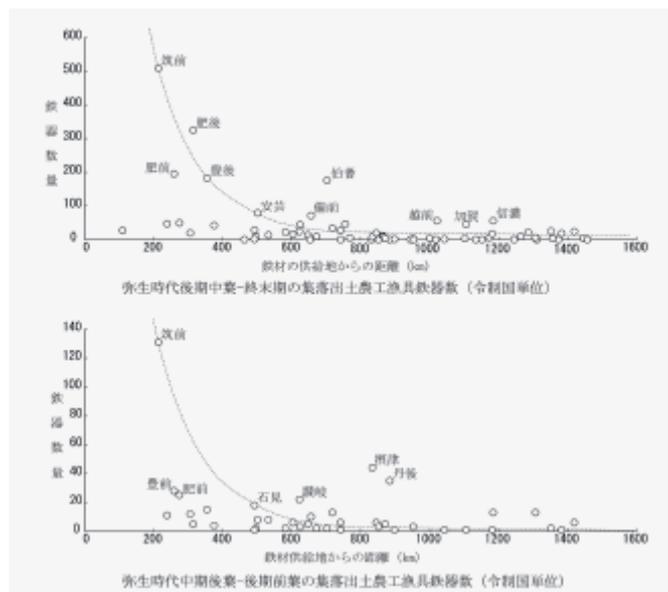


図 5.5 弥生時代の鉄器出土量



鳥取県 妻木晩田遺跡の出土鉄器



鳥取県 青谷上寺地遺跡出土鉄器



青谷上寺地遺跡出土船載遺物

青谷上寺木遺跡・妻木晩田遺跡にみられる朝鮮半島産鉄斧のように北部九州地域以外に分布する鉄器は朝鮮半島との直接交易路が存在した可能性を示す。

また、北部九州を除く 他地域での出土鉄器の大半が鉄鏃であるのに対し、両遺跡では 鉄鏃は少なく 多種多様な鉄器(農工具)が出土し、集落や周辺地域で使うというより、日本海沿岸 そして 山を越えた瀬戸内地域との交易品としての様相がある。また、妻木晩田遺跡には鍛冶工房が出土し、妻木晩田遺跡で鉄器加工を行っていたことが明らかになりつつある。

日本海沿岸では 瀧湖という天然の良港が点在し、それを最大限に活かした交易が独自の鉄器文化を生み出していったと考えられている。

参考 野島 永氏 「弥生・古墳時代における鉄器文化」
 高尾浩司氏 とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」—鉄器文化の伝わった道—
<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>

鑄造鉄斧再利用の実態②

- 鑄造鉄斧の表面処理による恩恵＝脱炭(だったん)処理

※脱炭処理
 鉄斧表面の炭素を減らして刃物としての柔軟性をもたせる熱処理。炭素分が高く硬い反面衝撃に弱く脆いという鑄造鉄斧の弱点を補い機能性を高める。

脱炭剤

◎当時のハイテク技術 青谷上寺地遺跡出土鑄造鉄斧(弥生時代初期)

鑄造鉄斧片再利用の実態

- 石器の製作技術による加工
 一擦り切る・割る・磨く

磨り切り後のあと

砥石で磨き身をつける
 青谷上寺地遺跡出土小型鉄器(鑄造鉄斧片再利用)

青谷上寺地遺跡 鑄造鉄斧破片の再利用 (模式図)

青谷上寺地出土鉄器にみる当時の鉄器製作手法(技術)

「鳥取発! 弥生文化シンポジウム 『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』
 高尾浩司氏討論スライドより 2011. 1. 30.